

歩こうか。

甲賀忍者の面影、
現代にまで伝えられる伝説、秘仏の数々……
甲賀の文化と歴史がぎゅうとうつまつた甲賀駅南部を歩きつくす

甲賀駅南部ウォーキングガイドマップ ～歴史の路散策路～

DWS (C) 2000
0748-60-2690
08:30~17:15 本日祝・年末年始
〒520-3308滋賀県甲賀市御野町豊田810 (0748) 52-2000
中高齢者見守り会 (主婦・介護) 中高齢者見守り会 (主婦・介護)



18 元龍寺 (がんりゅうじ)



戦国時代の甲賀武士多喜氏の祖、多喜家継の孫、来峰和尚が弘治八年(1284年)に開基したと伝わる古刹です。淨土宗としていますが、本来は天台宗と伝えています。現在は周辺の檀家八軒ほどが大切に管理されており、甲賀西国三十三觀音靈場第八番札所、また、準四國八十八ヶ所二番札所としての名刹として広く知られています。

御本尊の本像十一面觀音菩薩立像は、等身大の檜材で造られ、右手は親指と中指で印を結び、左手には蓮の蕾の一茎を捧げ持つという優美な姿で、切長の半眼と愛らしい口元が非常に上品で、人々に慈悲の光明を感じさせる平安期の秀作とされています。

毎年8月10日に開帳されています。

■(号)興願山 元龍寺 ■甲賀西国三十三觀音靈場第八番札所
■本尊本像十一面觀音菩薩 (平安期) ■順四國八十八ヶ所二番札所

19 長福寺 (ちょうふくじ)



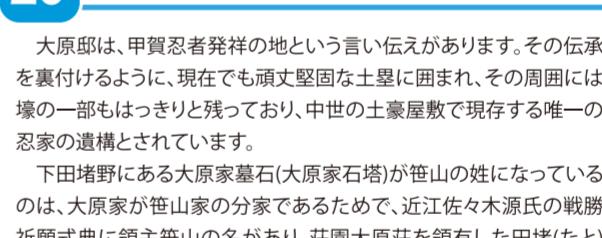
堂内には、重要文化財の聖觀音座像と子安地蔵が安置されており、聖觀音座像の高さは92.4cmの檜の一本造りで、宝冠をいただき、眉間に水晶をはめ込み、下ぶくれの小さな口もとは穏やかな顔つきである。寺伝では、平安初期の大同元年(806年)比良の僧天長比丘(高僧天長)によって長正堂という庵をつくれたと伝わっています。

足利時代の永享十一年(1439年)に火災に遭い、本尊の聖觀世音菩薩を除き、すべての堂塔を焼失しましたが、翌永享十二年(1440年)に本堂のみ再建され觀音像を改めて祀りました。しかし、元亀二年(1571年)に戦国の火は田堵野の里にも及び、二度の火災にあいましたが、再び觀音像だけが罹災を免れました。

その後、貞三年(1686年)阿弥陀如来像を迎え、淨土宗に転じ元覚が再興しました。奇跡的に二度の火災を逃れた聖觀音座像は、別棟に觀音堂を建て祀ることになりましたが、昭和六十二年(1987年)に檀家の篤志により、現在の御堂に移されています。

■(号)遊住山 長福寺 ■本尊 聖觀世音菩薩 (平安期)

20 大原邸 (おおはらてい)



大原邸は、甲賀忍者発祥の地といいうい伝えがあります。その伝承を裏付けるように、現在でも頑丈堅固な土塁に囲まれ、その周囲には塹の一部もはっきりと残っており、中世の土豪屋敷で現存する唯一の忍者の遺構とされています。

下田堵野にある大原家墓石(大原家石塔)が坂山の姓になっているのは、大原家が坂山家の分家であるためで、近江佐々木源氏の戦勝祈願式典に領主坂山の名があり、坂山大原庄を領有した田堵(たど)もしくは小名主(しょうみょうしゆ)として大原を名乗ったのではないかといわれています。



17 若宮神社 (わかみやじんじゃ)



がる中、境内の桜の古木のほか梅林が隣接しており、春には花の香りが参拝者をやさしく迎えます。

例祭として、毎年7月1日に若宮まつりが行われます。

トリックアートは色の濃淡や影を利用して絵画に遠近感を出し、より立体的に見える絵画です。絵に手を添えることで、より本物らしく見えます。甲賀駅には忍者をモチーフにしたトリックアートが至る所に描かれています。あなたのお気に入りのトリックアートの前でオリジナルのポーズをとって一緒に写真を撮って楽しんでみてください。

1 孝子塚 (こうしづか)



この地域では多くの古墳が出土しており、きつね塚もそれらの古墳塚のひとつと考えられています。畿内の交通要衝でもあったことから、莊園時代には「大原庄」に属し、のちには壬申の乱の軍勢が通過し、中世には源平の戦い、また、戦国時代には佐々木源氏を主とする甲賀武士団と天下統一をめざす織田軍との激戦の地となりました。

このため、多くの武士や農民がこの地で命を落としたものと考えられます。由緒、時代は定かではありませんが、きつね塚はこれら遠い戦乱の時代を経て今もなお、神聖な空間として近隣住民に崇められています。そのため、区画整理事業の際にも公園として、このきつね塚を整備保存されました。

2 捕陀樂寺 (ほだらくじ)



平安時代後期には、それまでの朝廷貴族政治の凋落と武士の政治進出が大きく時代を動かしました。

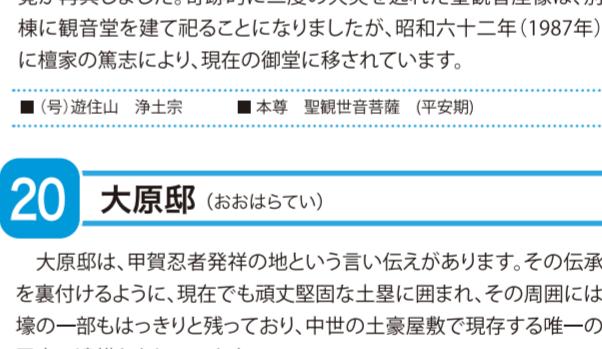
この頃、十一面觀音菩薩を本尊として建立されたと伝わる補陀樂寺はその後、源氏と平氏との戦いの渦中に巻き込まれ焼失したとされています。その際、本尊だけが焼失を免れ、江戸中期の寛延二年(1749年)に大原山河合寺と和尚によって再建されました。が、もとの補陀樂寺は現在より少し南の補陀樂寺遺跡内にありました。

明治時代となって、境内に尼僧が住職として居を構えたことから観音信仰の寺として人々の帰宿を集めました。

現在も境内周囲には土塁跡が残っており、補陀樂寺が幾多の戦場にあつたことを強く物語っています。

■別府山 天台宗 (甲賀西国靈場九番札所)
■本尊 十一面觀音菩薩立像 (平安時代・甲賀市指定文化財)

3 西宮神社 (にしみやじんじゃ)



古代より交通の要衝であった甲賀地域は、壬申の乱や源平の合戦。また、戦国時代には甲賀武士たちが活躍した幾多の合戦の舞台となりました。このため、地域に残る多くの城郭遺跡は中世城郭の研究対象としての評価は高く、陣山城跡もこれら城郭跡のひとつに数えられます。

構えは陣山と呼ばれる複郭の平城と、補陀樂寺境内の平城の二カ所がありますが、陣山はJR草津線に中央を分断され、さらに北半分が工場となってしまっています。補陀樂寺城は土壘をめぐらす方形で土壘の高さは2メートルよりも中央部が方形状で高さ4メートルの土壘で囲まれ、東側入り口の石段跡が確認できます。また、外郭は、高さ1メートルくらいの土壘をめぐらし、方形で中央部と平行していない特徴があります。往時の面影は薄れていますが、この城郭の構えから郷里の防衛のために戦った甲賀武士たちの活躍が偲ばれます。

春の例大祭のほか、春分の日には猿田彦命の古式による五穀豊穣、魔除け等の神事が保存・伝承されています。

■境内社、金比羅社 八坂社 天照大神宮

4 大徳寺 (だいとくじ)

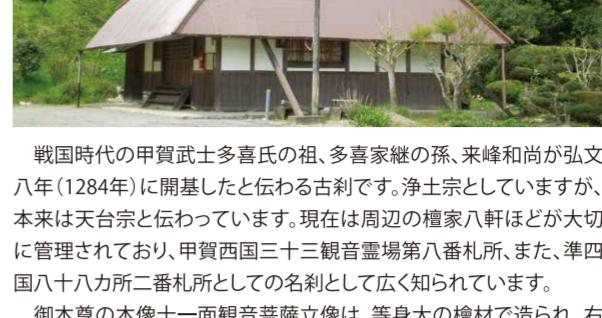


大正四十一年(1922年)に再建され、その後今日まで宮守会が境内の管理を行うとともに祭事を行う社として大切に守られています。

明治四十二年、大原祇園を例祭とする大鳥神社(鳥居野)に合祀されました。その後今日まで宮守会が境内の管理を行うとともに祭事を行う社として大切に守られています。

■本尊 阿彌陀如来 (慶長)

5 田中酒造 (たなかしゅぞう)



この地域では多くの古墳が出土しており、きつね塚もそれらの古墳塚のひとつと考えられています。畿内の交通要衝でもあったことから、莊園時代には「大原庄」に属し、のちには壬申の乱の軍勢が通過し、中世には源平の戦い、また、戦国時代には佐々木源氏を主とする甲賀武士団と天下統一をめざす織田軍との激戦の地となりました。

このため、多くの武士や農民がこの地で命を落としたものと考えられます。由緒、時代は定かではありませんが、きつね塚はこれら遠い戦乱の時代を経て今もなお、神聖な空間として近隣住民に崇められています。そのため、区画整理事業の際にも公園として、このきつね塚を整備保存されました。

現在の店構えは創業100年近くの老舗の歴史は何えませんが、店の中に入ると酒造りすべての行程の設備を備える本格的な酒造り工房です。

寺宝として、絹本着色山越阿弥陀図、絹本着色当麻曼荼羅図(いずも市指定文化財)のほか、芭蕉の句碑、超特大掛軸涅槃図等を所

■(号)興願山 淨土宗 知恩院派
■本尊 阿彌陀如來像

6 陣山城跡 (じんやまじょう)



古代より交通の要衝であった甲賀地域は、壬申の乱や源平の合戦。また、戦国時代には甲賀武士たちが活躍した幾多の合戦の舞台となりました。このため、地域に残る多くの城郭遺跡は中世城郭の研究対象としての評価は高く、陣山城跡もこれら城郭跡のひとつに数えられます。

構えは陣山と呼ばれる複郭の平城と、補陀樂寺境内の平城の二カ所がありますが、陣山はJR草津線に中央を分断され、さらに北半分が工場となってしまっています。補陀樂寺城は土壘をめぐらす方形で土壘の高さは2メートルよりも中央部が方形状で高さ4メートルの土壘で囲まれ、東側入り口の石段跡が確認できます。また、外郭は、高さ1メートルくらいの土壘をめぐらし、方形で中央部と平行していない特徴があります。往時の面影は薄れていますが、この城郭の構えから郷里の防衛のために戦った甲賀武士たちの活躍が偲ばれます。

春の例大祭のほか、春分の日には猿田彦命の古式による五穀豊穣、魔除け等の神事が保存・伝承されています。

■(号)興願山 淨土宗 知恩院派
■本尊 十一面觀音菩薩立像 (平安時代・甲賀市指定文化財)

7 滝川邸 (たきがわてい)



滝川氏は、天保十四年(1843年)七代目の時に滝川姓を賜わりました。その後、嘉永三年(1850年)にそれまでの滝川邸の母屋などを改築しましたが、玄関門や納屋、土蔵などは建築当時のままとなっています。

現在の滝川邸は、馬に乗りながら入りできる高い玄関の門構えが特徴で、この地方の武家屋敷形式として価値が高いものです。室町・戦国時代では間仕切りをしていても上部が開いた主殿造を基本としたものでしたが、戦乱の世が終わり、江戸時代になると、それまでの主殿造りから座敷飾りの床(とこ)・達板・書院・帳台構(装飾)を施し、柱は四隅の面を取った角柱、建具は引き違いの戸を敷き詰めた書院造へと変化しました。

滝川家の祖、紀美作貞勝は櫻野に城を築きましたが、嫡男でのちの滝川一益はこの櫻野城を嫡男範勝に譲り、この地「滝」に築城し「滝川」を名乗ったと伝えられています。

現在の滝川邸は、九代目当主の住居となっています。

■(号)興願山 淨土宗 知恩院派
■本尊 十一面觀音菩薩立像 (平安時代・甲賀市指定文化財)

8 藤岡邸 (ふじおかてい)



現在の藤岡邸は、馬に乗りながら入りできる高い玄関の門構えが特徴で、この地方の武家屋敷形式として価値が高いものです。室町・戦国時代では間仕切りをしていても上部が開いた主殿造を基本としたものでしたが、戦乱の世が終わり、江戸時代になると、それまでの主殿造りから座敷飾りの床(とこ)・達板・書院・帳台構(装飾)を施し、柱は四隅の面を取った角柱、建具は引き違いの戸を敷き詰めた書院造へと変化しました。

滝川家の祖、紀美作貞勝は櫻野に城を築きましたが、嫡男でのちの滝川一益はこの櫻野城を嫡男範勝に譲り、この地「滝」に築城し「滝川」を名乗ったと伝えられています。

現在の滝川邸は、九代目当主の住居となっています。

■(号)興願山 淨土宗 知恩院派
■本尊 十一面觀音菩薩立像 (平安時代・甲賀市指定文化財)

9 称名寺 (しょうみょうじ)



大正十二年(1923年)に草庵のあった地に、安土淨巖院第三世巖尊が開基し、運名譽上人、音名譽聖譽上人などの名僧を輩出するなど由緒を持つ名刹です。元和二年(1616年)に本堂などが焼失しましたが、約200年後の文化七年(1810年)現在の本堂が再建されました。

現在の店構えは創業100年近くの老舗の歴史は何えませんが、店の中に入ると酒造りすべての行程の設備を備える本格的な酒造り工房です。

寺宝として、絹本着色山越阿彌陀図、絹本着色当麻曼荼羅図(いずも市指定文化財)のほか、芭蕉の句碑、超特大掛軸涅槃図等を所

■(号)興願山 淨土宗 知恩院派
■本尊 阿彌陀如來像

10 桧尾神社 (ひのおじんじゃ)



甲賀地域は、東西の交通の要衝であったことや豊かな森林と農業に適した肥沃な土地柄から幾多の戦乱に巻き込まれました。このため、人々は世の中の平安と五穀豊穫を願って桧尾神社への参拝に努めました。

社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、かつてこのあたりに滝があり、時に青

龍となって雲中に垂れし、炎気の尾を垂れ給うことから社号を「火龍」としました。社伝によると、